

シンガポールの国の花は蘭で、至る所に飾られています。市内の街路樹は合歡の木で、大きく育ち、寄生木になって、文字どおり緑が滴るようです。至る所に、プルメリア、ブーゲンビリア、百日紅の植え込みがあり、ここは熱帯だ、太陽の国だと感じさせられました。マリーナ・ベイ地区のフラワー・ドームで、バオバブの木や、多種のサボテン、蘭を見て楽しみました。



心に染みた花は日本人墓地公園のプルメリアとブーゲンビリアです。ブーゲンビリアのトンネルがありました。柔らかいピンク色が、華やかで、すずし気な木陰を作っていました。いろいろな事情で故郷の土には帰れなかった人々の霊に寄り添い、訪れる人々の心に慰めを与えるような優しさを感じました。

もう一つは香りの高いプルメリアです。芝生に落ちていました。音吉顕彰会の役員で会長の右腕のY氏が一つ拾い上げて、花のガクの部分を指でクルクル回し、放り上げました、プルメリアは竹とんぼのように空へ飛びあがり、回転しながらヒラヒラと舞い落ちてきました。とても綺麗でした。プルメリアは「からゆきさん」と呼ばれた女性の墓地に沢山落ちていました。かつては木の墓標だったそうですが、年月が経って、朽ち果てたものを「精霊菩提」とだけ刻んだ墓石に変えて、ここにあります。牛乳パックくらいの大きさで、無名のまま、いくつも立ち並んでいました。日本とシンガポールとの悲しい記憶でしょう。



もう一つのシンガポールの花、それは女性でしょう。稲垣さんの友人、明朗快活なシャリーンさんが日曜日に私たちに会いに来てくれました。ご自分の教会の礼拝に連れて行ってくださいました。イースト・コースト・ロードにあるメソジスト教会です。会員数が 1500 を超え、牧師 3 名、スタッフ 15



名が働いておられます。日曜日には 8 回礼拝が行われ、言語別、世代別に自由に選んで参加します。玄関ホールは広く、歓迎ムードにあふれ、飲み物を頂きながら談笑する多くの人々で一杯でした。

私たちは「当代の」と区分けされた英語による礼拝に参加しました。礼拝堂は劇場のように階段式で、講壇がよく見えます。クワイヤの若者たち、バンドが並び、「賛歌」を 30 分近く演奏し、会衆はプロジェクターで写す画面を見ながら、共に緩やかに、自由に歌声を合わせ、繰り返して歌われる「賛歌」によって神へと心を集中していくようでした。その他の内容は祈り、説教、献金など、「伝統の」と同じようです。説教者は牧師ではなくリーダーでしたが、熱情を込めて、ユーモアを交えて、アブラハムのイサク燔祭の箇所から「神に受け入れられる礼拝」について話されました。会衆は拍手したり、笑ったり、説教者と心を合わせていました。

礼拝後に、セキュリティ担当者が 15 名ほど任命されました。自由な礼拝を守るためには、普段・不断の監視が必要だと言います。これはシンガポールの国是のようです。周囲はイスラム諸国です。そういう意味ではシンガポールは緊張感の高い国でしょう。礼拝後、夜遅くまで、シャリーンさんは案内してくれました。彼女の教会では信徒もグループを作って、海外宣教活動を展開し、東アジアやASEAN諸国にも伝道に出かけるのだと熱心に話してくれました。